

ディケンズ・フェロウシップ日本支部

The Dickens Fellowship of Japan

平成26年度秋季総会 プログラム

Annual General Meeting 2014 — Programme

日時：2014年10月11日（土） Date: 11 October 2014

会場：愛知県立大学 長久手キャンパス（愛知県長久手市茨ヶ廻間1522番3）

Venue: Aichi Prefectural University, 1522-3 Ibaragabasama, Nagakute-City, Aichi

理事会 Board of Trustees Meeting (12:30 – 13:15)

学術文化交流センター2階 文化交流室A

総会 Annual General Meeting (13:30 – 14:00)

学術文化交流センター K棟 2階 小ホール

(Small Hall, Second Floor, Bldg. K, Academic and Cultural Exchange Center)

第1部 研究発表 Short paper session (14:10 – 15:30)

司会：中村 隆（山形大学教授）Takashi NAKAMURA (Yamagata University)

1. 中妻 結（東京女子大学非常勤講師）Yui NAKATSUMA

(Tokyo Woman's Christian University)

「活字からの逃走——*Oliver Twist*とヴィクトリア朝読み物文化」

Running away from the Domination of Printed Words: *Oliver Twist* in the Victorian Literary Culture

2. 橋野朋子（関西外国語大学講師）Tomoko HASHINO (Kansai Gaidai University)

「ラファエロ前派批評とディケンズ、コリンズ」

Dickens and Collins over Pre-Raphaelitism and Aesthetic Issues

第2部 講演 Lectures (15:50 – 17:30)

司会：新井潤美（上智大学教授）Megumi ARAI (Sophia University)

講師：鳥取猛志（筑波大学 リサーチ・アドミニストレーター）Takeshi TOTTORI

(Tsukuba University)

「“A Poor Man's Tale of a Patent”におけるJohnの科白“Patent it”への驚き」

Surprised by “Patent It” in “A Poor Man's Tale of a Patent”

講師：鵜飼信光（九州大学教授）Nobumitsu, UKAI (Kyushu University)

「『消されがたく書かれている』——『荒涼館』における書くことの書かれ方」

“Indelibly Written”: How Writing Is Written in *Bleak House*

懇親会 (18:00 – 20:00) Convivial Party

会場：愛知県立大学生生活協同組合 食堂パルク

会費：3,000円

研究発表 Papers

活字からの逃走—*Oliver Twist*とヴィクトリア朝読み物文化

東京女子大学非常勤講師 中妻 結

1830年代から1840年代の読み物文化は、「声の文化」から「文字の文化」への過渡期にあった。庶民の多くが街頭の呼び売りの声を通して楽しんだブロードサイドは、黙読に頼る読み物—一般大衆向けニューゲイトノヴェル、ペニードレッドフルや中産階級向けヴィクトリア朝小説—に徐々に取って代わられていった。

本発表では、*Oliver*の半生が当時の読み物文化の変遷を内包していることを検証する。*Oliver*は、他者が提供する活字によって人生を書き換えられながら、中産階級の紳士のみならず、群集と化した庶民によって「街頭」から「書齋」へ追われる。結果的に中産階級向け小説の主人公として地位を獲得するが、無意識の内に活字から逃げまどう*Oliver*は、印刷されたことばばかりに頼る文化への不安感を示している。Dickensによって不動の地位を確立されつつあった小説そのものが、皮肉にもその初期作品の中で揺さぶりをかけられているのである。

ラファエロ前派批評とディケンズ、コリンズ

関西外国語大学講師 橋野 朋子

ロイヤル・アカデミー付属美術学校における因襲的な教授法に反旗を翻して「自然」をありのままに描くことをモットーとしたラファエロ前派は、1850年代初頭、彼らの「美」よりも「真」を優先させようとする姿勢ゆえに大いに批判された。ラファエロ前派を辛辣に批判したディケンズの‘*Old Lamps for New Ones*’(1851)もその一環であるが、ウィルキー・コリンズもこの時期、ラファエロ前派の真摯な姿勢に理解を示しながらも「大衆の好み」への配慮の必要性を説いている。しかし一方でディケンズは‘*Old Lamps for New Ones*’から5年後の1856年、ロイヤル・アカデミーを始めとした芸術の権威的立場にあるものを真っ向から批判したコリンズの記事を*Household Words*誌の巻頭に掲載している。本発表では、1850年代の美術批評の流れを追いながらディケンズ及びコリンズが「芸術」、「大衆文化」に対してどのような考えを抱いていたのかを両者の論評記事を元に検証していく。

講演 Lectures

“A Poor Man’s Tale of a Patent”におけるJohnの科白“Patent it”への驚き

筑波大学リサーチ・アドミニストレーター 鳥取 猛志

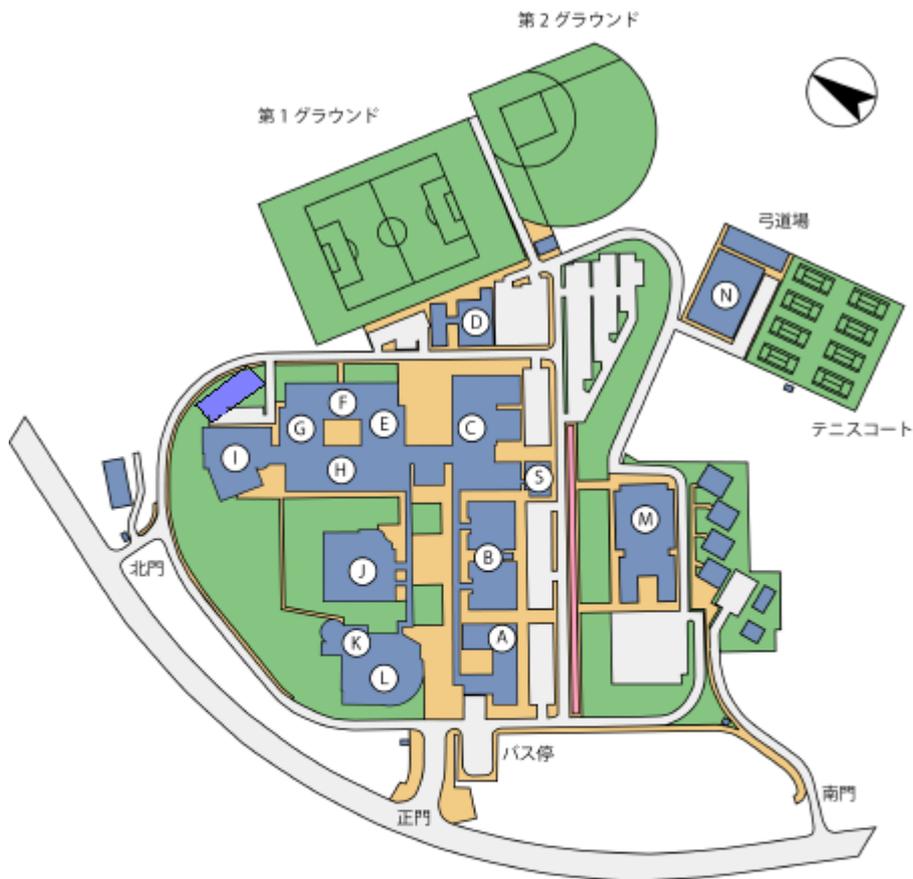
私は、2008年に本支部に参加させて頂きました。民間企業で技術開発等に27年間、独立行政法人で産官学連携に4年半従事した後、現在は大学で産官学連携を支援する業務に従事しております。最近、私は、英国の特許法制度の歴史を参照する機会があり、調査した文献から、ディケンズの短編“A Poor Man’s Tale of a Patent”の存在を初めて知りました。ディケンズは、本短編の前半で、鍛冶屋のジョンが新たな考案を成し、その発明の特許にすることに至る経緯を描いています。この部分、読み飛ばしがちです。しかし、そこには、現代の技術革新の大競争に立ち向かう人々にとって、強く意識しておくべき内容が凝縮されています。それらの言葉に私は同感するものの、幾度か読み返していくうちに、「こういった言葉は、簡単には出てこないし、互いに繋がらないだろう」と懐疑的になりました。それは、私自身の特許出願の実務経験に基づく視点が効いてきたためだと思います。しかし、読み返すたびに話の運びのあまりの巧みさに気付かされ、私は、「集約すると、この言葉に行きつくのか」との思いに至りました。本日は、本短編の楽しさを少しでも皆様にお伝えできればと思います。

「消されがたく書かれている」——『荒涼館』における書くことの書かれ方

九州大学教授 鵜飼 信光

『荒涼館』の第16章には、読み書きができず、動物に近い無知な状態にある浮浪児ジョーにとって、生活がいかに奇妙なものであるかの描写がある。そこでは読み書きの能力は、その欠如が嘆かれる善きものであるが、一方、ジェリビー夫人に手紙の代筆をさせられていた娘キャディーにとって、書くことは呪わしいものであった。その後彼女が生んだ娘の顔にはインクのような染みがあり、耳も聞こえない。インクにまみれていたキャディー

キャンパスマップ



- | | |
|------------------|--------------|
| ① 管理棟 | ⑩ 食堂 |
| ② 講義棟 (南棟) | ⑪ 図書館 |
| ③ 情報科学部棟 | ⑫ 学術文化交流センター |
| ④ 学生会館 | ⑬ 講堂 |
| ⑤ 外国語学部棟 | ⑭ 体育館 |
| ⑥ 実験・実習棟 | ⑮ プール |
| ⑦ 日本文化学部・教育福祉学部棟 | ⑯ 特別講義棟 |
| ⑧ 講義棟 (東棟) | |